

「第四章 しつけ」

流されている。

美哉は出雲荘の庭で一人、居合いの練習を繰り返していた。

瞬間的に繰り出される刀は、肉眼では捉えきれない速度で走り、その先にあるものを真っ二つに両断する。

刀の流れを見ながら、自分が佐橋青年のセキレイとして羽化してしまったこと、そして彼に流されてしまっていることをあらためて理解し、その行為を恥じて唇を噛んだ。

「私がすっかりしなれば……」

美哉は決意めいた表情を見せ、刀を常人には見えない速度で振り、同時に納めた。目の前に舞い落ちる木の葉が一枚から二枚に分かれ、頼りなく落ちていく。

「大家さん、精が出ますねー」

「つつ！」

突然後ろから現れたのは佐橋皆人である。

美哉は驚いて身構えようとしたが、皆人はすぐ後ろにいたので距離を保つことができず、

頬が一瞬にして赤く紅潮してゆく。

しかしかろつじて、美哉は胸の内から沸いてくる葦牙への愛情を押さえ込み、平静を保つた。

「さ、佐橋さん。何か御用ですか……？」

「ずっと見てたんだけどさ、なんか悩んでるように見えたから。心配事とかあったら聞きましょう？」

皆人は悪気がなさそうな笑顔で言つが、美哉の心境は複雑極まりなかった。

目の前にいる人物が元凶で悩んでいるのに、その人物に「心配事があるなら聞くよ？」と言われた。さすがの美哉も、この質問には怒りが込み上げてくる。

「……あなたが、あなたが私を羽化させたから……悩んでるんですっ！」

怒りから声が震え、親の敵でも見るような目で皆人を睨みつけた。

痴話喧嘩どころではなく、美哉の腰には刀が装備されているので危険な状態に見えた。

しかし皆人は動じる様子もなく、少し考えた風にした後、口を開いた。

「じゃあ、美哉にはもつと好きになつてもらわないとね」

「な、何を言つて……」

警戒する美哉とは対照的に、ニコつと笑顔で答えた皆人は、美哉の手を引っ張ると出雲荘のトイレへと向かった。

「離しなさいっ！ やめ……っ、んむ……ッ！」

手を掴んでいると暴れようとするので、皆人は美哉の唇に強引に口付けをした。

粘膜接触により嫌がついていた美哉の瞳が熱を帯び、大人しくなる。そのままトイレに入り、美哉を個室に連れ込むとカギを閉めた。

「っはあはあ……… どういうつもりですか！ こんなところに……い……っんん」

美哉があまりに大きな声を出すので、再び口内に舌を入れて栓をする。

「チユツ……ふう、いいですか大家さん、今ここで大きな声を出して、結ちゃんや月海、くーちゃんやウズメさんたちが来たら大変なことになりますから、静かにしてください」

「はあ……、はあ、………わかりました。 ですが、こんな所に連れてこられる覚えはありません」

美哉は暴れるのをやめ、落ち着いた表情で皆人を見つめた。 睨んだというより、見つめたという表現が正しい目つきだ。

洋式トイレの個室に着物を着た大家さんがいるというのは、なかなかシユールな光景だった。 皆人は閉じたままの便座の上に美哉を座らせると、話を始める。

「こんな事をするのは、大家さんしかないんですよ」

「………？」

「結ちゃんや月海には、一切手を出してませんし、夜も大家さんに止められましたから、

こんな風に女性と一緒にいるのは、大家さんしか考えられないんです」

「……………」

ハツと気付いたように、美哉の表情が変化する。

確かに、佐橋青年と女性の肉体的な関係は、ここ出雲荘では皆無だった。

それも何かありそうだった場合には、決まって美哉が必死に止めていたからだ。

今はその抑止力ともいえる浅間美哉自身が、皆人のセキレイになってしまったため、行為を注意する者はおらず、こつこつして遠慮なく触れられるのが羽化をさせた美哉ということになっていた。

美哉は「大家さんしか考えられない」と言われたことに、告白のようなセリフだと感じたのか、ときめいてしまい、胸の内が熱くなっていくのを感じた。

女性関係を持っているのは他には誰もいない。妻だ妻だとあれだけ主張をしている月海や結ですら、皆人と肉体の関係がない　と考えると、美哉は何故かどつしよつもなく、うれしい気持ちが溢れ出てきた。

それは皆人のセキレイとしての独占欲なのか、頭が沸騰していた今の美哉には判断ができなかった。

さっきまでは特に感じなかったが、皆人のことを意識し始めた美哉は、このトイレの個室

で二人きりになっているという状態を、何だかいけないことをしているように感じ始めていた。顔が熱く火照ってゆく。

「あの……佐橋さんは、私とだけしか……しないのですか？」

「大家さんに止められてましたからね。本当に、我慢のしすぎて下半身がおかしくなるくらいにパンパンですよ」

洋式便座に座っている美哉の前に皆人が立っているの、美哉が少し視線を移すと、そこには皆人の下半身が飛び込んでくる。

パンパンになっているというのは冗談でも何でもなく、不純異性交遊として性欲を美哉に禁じられていた皆人は、毎日毎晩セキレイたちの肉体に囲まれながらも、ずっと我慢をしていた。魅力的な女性がいるのに、手が出せない。できることなら、たっぷりと中に注いで、心ゆくまでその気持ちよさを堪能したい。

そういつた欲求は溜まりに溜まり、今ここで美哉の前に晒された。

「そこで、俺のセキレイとして大家さんにしか頼めないことがあるんですが」

「……何ですか？」

「これを口で啜えて、中の精液をしぼり出してください」

美哉の前にくいっと下半身を擦り寄せる。

「ふ……、ふざけないで下さい！ そんなはしたない事を……私はしません。」

それに私はまだ、あなたのすべてを許したわけではありません」

表情を変えることなく、冷静に返される。

「じゃあもう、下ろしますよ。これを大家さんに好きになってもらわないといけませんし、やってくださいね？」

「……………ですから、わ……………私は……………」

ジ……………ッ

皆人はゆっくりとジッパーを下ろすと、中から勢いよくそり立つた肉棒が飛び出した。

それは我慢に我慢を強いられていたからか、ギンギンに反り返っており、はちきれんばかりの凶悪な形へと膨らんでいた。玉袋も破裂しそうなぐらいに膨張している。

赤黒くそり立つ肉棒を前に、美哉は唾を飲み込むと、身体の奥が熱くなってくるのを感じた。

皆人は肉棒を美哉の口元へと近づけてゆく。

「さ、佐橋さん！ 何をっんん……………やめなさ……………いっんぐんんん！！」

「ハアハアっ……………出したら我慢できなくなってきた……………ほら、早く啜えてっ」

美哉の頭を両手で掴み、肉棒を口に押し当てる。美哉は信じられないといった表情をしたまま、口内への侵入を許してしまった。

「んぶっ……………、ちゅっ、ちゅぶっジユブッ……………っ、はぁはぁ、佐橋さん……………何をして……………っん

んぶっ！」

ぐぼっぐぼつと音を立てながら口内に無理に出し入れするが、美哉は動揺しているからか侵入を拒むようにぎこちない動きをしている。

「はあ、はあ……、やったことないんですか大家さん？」

あまりのぎこちなさに、皆人は肉棒を美哉の口から引き抜いた。無理矢理に突っ込まれたそれは唾液と共に飛び出し、美哉の着物の上にポタポタと水滴がこぼれる。

「う……っ、ごぼっ……まだ話してる最中なのに、ひどいです佐橋さん……こんな知りません……っ！」

知らないとはどういう意味だろうか。皆人は目の前で演技でもなく本当に何も知らない顔をした美哉を見て、人妻だったのに何も知らないのか？と、疑問を感じると同時に、ソクソクしたものが背筋を走った。

「人妻なんだから、知らないなんてことないでしょう。ほら、啜えて啜えてっ」

「んんんっッ、んぶっ、んむっ！　じゅぶっじゅぶッ……んぶっ、ジュブッんんん~~~~っ」

美哉の目からは涙が溢れているが、身体は特に縛られているわけではないので、動こうと思えば自由に動ける。皆人に頭を抑えられている状態ではあるが、肉棒を啜っていた美哉は、自らの手で中断させようとはしなかった。

「はあっはあ、……いいですよ大家さん……ッ」

前後に腰を動かし、口内の奥に突き刺すようにピストンさせながら、美哉の唾液によるジユポジユポツという卑猥な音がトイレの個室に響きだした。浅間美哉の口内を犯しているという実感が沸いてくる。

女性に対する肉欲を我慢していたからか、それが解放された喜びなのか、肉棒からは先走りの汁がたつぷりと溢れてきた。美哉のよだれと混ざった潤滑油によって、口内が性器を思わせるほど心地よい肉感を味わわせてくれる。

行為自体はぎこちないものだったが、無理矢理にこの大家さんの口を犯していると思うと、日頃の美哉を知っている皆人は下半身に昇りつめるような感覚がせり上がってきた。

「うあ……っ、出るっ！ 大家さん……っ！」

「ん、んっ！ ジュプツ！ んぶっ、じゅぽっんんぐ！ ぐぼっ、ぐぼっんんっ！」

どびゅるるるっ！ どぶっ！ びゅるるるるるっ！ ドブツドブツ！

「んっんんんんー……っ！」

放たれた精液は、すべて美哉の口内に射精された。

美哉は熱くなつた肉棒から突然何かが出てきたので唇を離そうと頭を振っていたが、皆人の両手が頭を押さえていたので動くことができないまま、口内ですべてを受け止めることになった。

(体験版はここまでになります。)

閲覧いただき、本当にありがとうございました。

よろしければ、製品版もよろしくお願いいたします)